

疾風の如く

福島県
郡山俊英スクール

代表
橋本 紘樹さん

恩師は、齒に衣着せず言った。
「あんたはダサイ」。
しかし、その言葉が自分を変えた。
過去と他人は変えられなくても、
未来と自分を変えられる。
だから、僕は塾をやる。
人を変えることはできなくても、
変わるきっかけは届けられるから。

「あんた、すごくダサイよ」
大好きだった先生からの叱咤

橋本紘樹は、今もその言葉が忘れられない。「あんた、すごくダサイよ。口ばかりじゃん」。優しくて大好きだった、中学の保健室の先生。母親がいない家庭環境で育った橋本に

とって、まさに親代わりと言えるほどの存在だ。そんな先生が、当時中3で生意気盛りだった橋本の姿勢を容赦なく斬った。バイタリティのほぼすべてを部活動に全振りし

ていた中学時代。陸上部を中心に、4つもの部活を掛け持ちしていた。しかしその分、勉強はほどほど。高校入試も近いのに、志望校の偏差値64に対して、現状では47。担任の先生にも「(今のままでは)地球がひっくり返っても合格で

きない」とまで言われていた。それでもどこか樂觀主義的で、必要な努力もせず、恋人と過ごす時間を楽しんでいたという。保健室の先生は、それを厳しく指摘したのだ。

い素直さこそ、橋本の強みだったと言えよう。「いや、もうハツとしました。それで『目覚めた』と言っていかもしれません」と回顧する。以来、1日8時間の猛烈な勉強で一気に学力を伸ばし、見事に志望校合格を果たした。



この原体験は、自分で塾を開いた現在に至るまで、橋本を支えるアイデンティティとなっている。

「僕は教育者に恵まれたなと思つて。だから、僕もそんな存在になりたいんです」。

自分が評価されていたのではない
塾のブランドに乗っかっていただけ

大学を経て、大手学習塾に就職した。「生意気で言うことも聞かないし、同期の中でも1番期待されていない存在だった」と明かすが、恩師の教えのおかげが、必要な努力はできる人間になっていった。校長やプロック長など責任ある立場を歴任し、きちんと成果も出してきた。一方で、「もっと評価されてもいいはずだ」という不満も抱えるようになり、やがて同じ塾業界で転職。

ところが、そこで鼻っ柱を折られることになる。まったく結果が出せないのだ。実は転職先の塾は、前職の会社ほど事業規模が大きくない。橋本はそこをき違えていた。「何のことはない、僕は会社のスケールメリットに生かされていただけだったんです。生徒や保護者は塾のブランドに価値を見出していたのであって、僕に価値があったわけじゃない。とんでもない思い上がりでした」。

しかし、ここでも武器である素直さが発揮される。「自分の実力をもう1回磨き直せと言われてるんだと思いました。あの経験が

あつたからこそ、10年は塾講師としての寿命が延びた。今思い出しても、絶対に必要な挫折だったと思います」。

自分たちが関わることで
生徒が変わるきっかけを届けたい

そんな反省と再構築の日々は、橋本にある種の達観をもたらす。「僕は何かにつけ、他責にしてしまう弱さのある人間だったと思うんです。それならむしろ、人のせいにできない、逃げられない状況のほうがいいんじゃないかと思つて」。

「過去と他人は変えられない」という言葉もあるし、自分が「変えてやろう」なんておこがましいことは思わない。しかし「変わるきっかけ」を届けることはできるはず。

いま橋本が見つめているのは、目の前の一人ひとりが「自分の物語」をつかむ瞬間だ。子どもたちの未来をそっと押し出す存在でありたい、そこに使命感を見出している。(敬称略)

そこで一念発起して独立、2020年に立ち上げたのが「郡山俊英スクール」だ。小学生から高校生まで

「お前はダサイ」と叱ってくれたように。

橋本 紘樹 HIROKI HASHIMOTO



●郡山俊英スクール
<https://koriyamashuneischool.com/>

文/松見敬彦(トリガーワークス)

すべてを変えた、あの日の一喝
その恩を、次の世代へ送れ